

# 看護職における

## メディア・リテラシーの現状

— 学歴と学習場所よる特性 —

西 田 直 子

### 要 旨

この論文は、医療情報化によって看護婦・士のメディア・リテラシーが学歴やパソコンの学習場所による特性がみられるのかを調べたものである。研究方法は、調査研究で行い、調査対象は、京都市内の看護職員2,219名であった。対象者に無記名自記式調査表を配布し、回収数は1,814名（回答率81.7%）であった。調査項目はメディア・リテラシーの質問項目として周辺情報リテラシー、パーソナル・コンピュータ（以下PCと略す）・リテラシー、ネットワーク・リテラシー、意欲であった。その結果、対象の属性は「看護婦・士」（助産婦・保健婦を含む）1,514名（平均年齢29.9±8.1歳）を対象にした。メディア・リテラシーは学歴でみると大学卒で高くみられ、これは大学では情報教育内容や情報教育環境が整っているためと思われる。また、パソコンの学習場所では大学や小学校が高く、職場研修会やパソコン教室が低かった。メディア・リテラシーを高めるため環境や指導体制を整え早期の情報教育が必要である。

キーワード：メディア・リテラシー、学歴、学習場所、看護婦・士

### はじめに

医療における情報化は、1970年代に看護業務において入院退院の管理、勤務体制の管理に導入され、看護業務の合理化や看護援助を効果的に支援するシステムに進んできた。1998年には厚生省の電子カルテ導入や遠隔治療導入まで発展してきた。このような医療の情報化のなかで看護職はメディア・リテラシーが求められている。しかし、看護婦の誰もが情報機器を使用できるわけでもなく、その活用する能力には格差がみられる。そこで、メディア・リテラシーは、

年齢やライフコースとの関連があり、キャリアとして教育、職業、結婚、家庭、社会活動などにより影響され、年齢に応じた役割として地位、権限、報酬、労働力、設備などの要因で変化すると考える。今回はキャリアとしての学歴の差異によるメディア・リテラシーの格差について調べた。また、パソコンの学習場所による格差についても調べた。

## I. メディア・リテラシーの定義

メディア (media=medium の複数形) とは、情報を伝達する手段、媒体のことである。M. マクルーハン「メディアはメッセージである」<sup>1)</sup> と述べ、「メディアが個人および社会に及ぼす結果というものは、われわれ自身の個々の拡張によってわれわれの世界に導入される新しい尺度に起因する」と述べ、人間が自分の能力を拡張するために開発したものにとらえ、テクノロジーそのものと考えた。つまり、人間はテクノロジーを使って人間の能力を拡張し、テクノロジーも開発してきたのである。このことはメディアと情報や記号との区別ができなくなる。また、吉見は「メディアとは絵具や活字、電気音、電気光といった記号表現の質料をメディアと呼ぶことがある。また、テレビや電話、ラジオ、書物といった質料としてのメディアが存在する。」<sup>2)</sup> と述べている。つまり、情報や記号が文字や絵画になるのか、電気音 (音声)、電気光 (映像) に乗るのかという視点で媒体をとらえ、ここでは媒体ということを強調し乗り物として考える。

リテラシー (literacy) は、新社会学辞典<sup>3)</sup> では「もとの意味は読み書き能力、教育・教養のあること」といわれ、コミュニケーション論では「識字率」という意味で使われている。19世紀頃の新聞の普及時に読み書き能力の所有者が問題になったが、20世紀になると活字の媒体が音声や映像情報の解読・受容能力が問題視されてきた時点からリテラシーが「識字率」という扱いより、メディア・リテラシーといわれるようになった。

E. M. ロジャーズは「リテラシーは読んだり書いたりするために書かれたメッセージをエンコードしたりディコードできかかれた形のシンボルを個人的に保持する程度であると定義される」<sup>4)</sup> と述べている。また水野は、「各メディ

アを利用するには、ふさわしいメッセージをつくる記号化やつくられたメッセージを解読するための能力が必要となる。そのような能力を『リテラシー』あるいは『メディア・リテラシー』と呼ぶ<sup>5)</sup>と定義している。また、情報教育の分野では、メディア・リテラシー (media literacy) は、①受け手としてメディアの特性を理解し判断する能力〔わかる〕、②使い手としてメディアを選択する能力〔使う〕、③作り手としてメディアを構成し製作する能力〔作る〕<sup>6)</sup> という3つの要素がある。

メディア・リテラシーが国際的に言われてきたのは、「メディア・リテラシー協会 (Association for Media Literacy)」(カナダの市民組織)によると、「メディア・リテラシーとは、メディアはどのように機能するのか、メディアはどのように意味を作り出すか、メディアの企業や産業はどのように組織されているのか、メディアは現実をどのように構成するかなどについて学び、理解と楽しみを促進する目的で行う教育的な取り組みである」<sup>7)</sup>と述べている。また、「AML (Association for Media Literacy) の目的」<sup>8)</sup>では、「マス・メディアの本質、メディア企業が使うテクニック、テクニックの効果について学ぶ者が十分な情報を手にし、それらをクリティカルに理解できるようになるのを援助すること」と述べている。また、日本においても、鈴木みどりは、「メディア・リテラシーとは市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価しメディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力を指す」<sup>9)</sup>と述べている。現代のような高度情報化社会は科学技術・通信技術による情報ネットワーク社会であり、教育においても科学技術・通信技術を駆使するメディア・リテラシー (情報媒体を使う能力) の育成が求められる。

また、菅谷は「メディア・リテラシーとはメディアが形作る「現実」を批判的に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力のことである」<sup>10)</sup>と述べ、機器の操作能力に限らず、メディアの特性や社会的意味を理解し、メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に「批判」し、社会に向けて効果的にコミュニケーションをはかることでメディア社会と積極的に付き合うための総合的な能力をさす。単なるコンピュータを使いこなす「コンピュータ・リテラシー」や「情報リテラシー」だけをさしてはいない。

また、メディア・リテラシーという用語の中に含まれると思われる「情報リ

テラシー」いう言葉がある。これについて鈴木は「『情報リテラシー』とは、情報社会の進む現代社会において、情報の利用能力が、かつての文字のリテラシーと同じような位置を社会に占めているという認識から命名した用語である」<sup>11)</sup>と述べている。この「情報リテラシー」は、単純な機会操作能力ではなく、「情報を取り扱う能力」というとらえ方で、従来の文字リテラシーに関する社会科学的論議が情報リテラシーの社会的意味の分析へとまとめられている。そして、情報リテラシーの中核部分として「高度情報社会で広く普及している

表1 メディア・リテラシーの項目

＜周辺情報のリテラシー＞

- 1) 定期的に雑誌を読む
- 2) 定期的に雑誌を買う
- 3) 情報はできるだけ多く入手したい
- 4) ビデオの番組を予約する
- 5) キャッシュカード等の暗証番号を工夫する
- 6) 留守番電話の留守録の設定と再生をする
- 7) ファクシミリで書類等の送信をする
- 8) オーディオ機器（ウォークマン、コンボなど）を持っている
- 9) 携帯電話・PHS・ポケットベルのいずれかを持っている
- 10) 家庭用ゲーム機（ファミコンなど）を持っている
- 11) 図書館で欲しい本を端末を使って検索できる

＜コンピュータ・リテラシー＞

- 1) 無理なくキーボードで入力できる
- 2) ソフトウェアをコピーして使わない
- 3) パソコンで文章を作成をする
- 4) パソコンでグラフ作成をする
- 5) パソコンで電子メールをする
- 6) パソコンでインターネットをする
- 7) パソコンでホームページをする

＜ネット・リテラシー＞

「コンピュータ・リテラシー」の5)～7)の3項目

＜意欲＞

- 1) 定期的に雑誌を読む
- 2) 定期的に雑誌を買う
- 3) 欲しい情報はお金を払ってでも入手する
- 4) 人よりも早く情報を得たい
- 5) 情報をできるだけ多く入手したい

情報機器一般の利用の基礎となる基本的な知識・技能<sup>12)</sup>を情報機器能力ととらえ、広くは人間のコミュニケーション全般や情報処理全般に関連させていた。『通信白書』では情報リテラシーとして情報機器操作などに関する観点から定義する場合と操作に加えて、情報を取り扱ううえでの理解、さらには情報および情報手段を主体的に選択し、収集活用するための能力と意欲まで加えて定義した<sup>13)</sup>。そこでは、新たに情報項目としてマルチメディア (multimedia) の印刷媒体 (新聞・雑誌・文献)、電波媒体 (テレビ・ラジオ・携帯電話)、コンピュータ、CD-ROM を含めた情報機器の項目を挙げていた。

そこで、著者はメディア・リテラシーとは、「情報機器などのメディアの操作能力および情報を取り扱う上での理解、情報収集の活用や研究活動のための能力と意欲およびメディア活用の倫理的行動」とした。今回取り上げるメディア・リテラシーは主要なメディアとなる周辺情報リテラシーとして「雑誌を読む」「雑誌を買う」情報入手の意識、価値観やテレビの活用の操作とビデオ録画を、ATM の操作、携帯電話、家庭用ゲーム機、図書館での文献検索などの11項目を考えた。コンピュータ・リテラシーはパソコン操作利用とネットワークの利用の7項目と意欲の5項目を考えた (表1)。

## II. 情報教育の変化

従来のメディアである書籍や雑誌などの印刷メディアでは、義務教育制度のなかで識字や解読という知識・技能の能力に格差は少なく、テレビ・ラジオなどの電波では知識や技能は不要であった。しかし、高度情報社会におけるパソコンやワープロの利用には知識や技能が必要であり、能力の高いものは社会で高く評価され、能力の低いものは低く評価され、社会的弱者としてみられてきた。コンピュータ・リテラシーに関する教育は、1969年に「高等学校における情報処理教育の推進について」の答申で高等学校に導入されてきた。1980年になると初等中等教育にもコンピュータの利用についての答申が出された。初等教育では理科、国語などで学習を深め、図表で表現する場合に使用された。また、クラブや学級活動、図書館での利用がされていた。中学校では技術・家庭の「情報基礎」(選択)で位置づけられた。つぎの高校教育では学習指導要領

でコンピュータを利用した学習指導として数学、理科、家庭で社会変化に対応できる能力の育成として活用してきた。1992年の東京都の調査（東京都生活文化局）では「現在使用している」が小学生高学年19.7%、中高生27.6%であった<sup>14)</sup>。

1995年のSSM調査「情報コンシャスネス」では、短大卒以上31.6%、全体25.6%と高学歴層が有意に多く、使う目的や使う能力がある管理、研究、趣味から経営・管理職または専門職に偏り、リテラシー獲得機会として学歴も因子となる<sup>15)</sup> 報告もみられる。

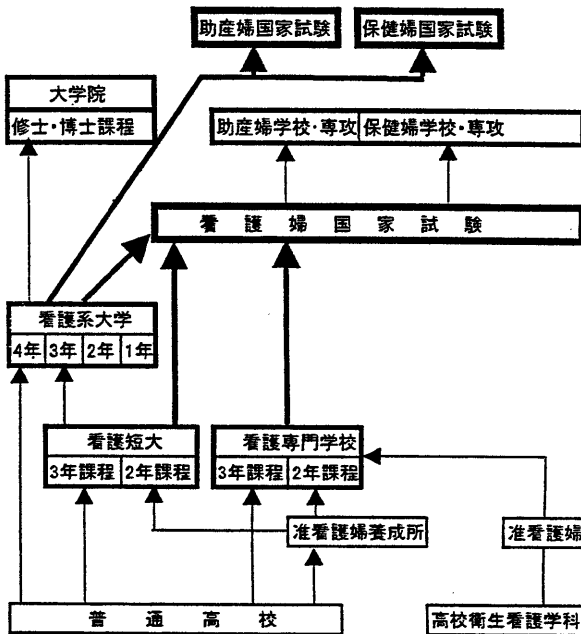
公立学校におけるコンピュータの設置校数（設置率）は、1997年3月で小学校21,701（90.7%）、中学校10,465（99.8%）、高等学校4,163（100%）、特殊教育学校897（98.7%）で全体で94.3%普及している。コンピュータの設置台数は、1997年には全体で19.8台であったが、1999年には24.9台と増加した。コンピュータ指導できる教員は1997年には19.7%であったが、1999年には26.7%になった。さらに、学習指導要領の改訂により2002年から小中学校で情報教育が実施されるため、「公立学校教員のコンピュータ活用能力の向上」に2000年度予算に計上された<sup>16)</sup>。

### Ⅲ. 看護教育における情報教育

看護職は保健婦助産婦看護婦法に基づいた、保健婦、助産婦、看護婦および准看護婦をさす。業務内容は、施設や地域で生活する病人に対する療養上の世話、診療の補助、保健指導および健康管理を行う仕事である。その看護職の看護教育制度は、大学、短期大学、専門学校などに分かれ教育が行われている（図1）。

看護教育は昭和23年の保健婦助産婦看護婦法制定以来、学校教育法第1条に基づいて大学や短期大学の教育や第82条と保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則にもとづいた3年課程と2年課程の複雑な教育制度のなかで行われていた<sup>17)</sup>。2000年3月の第89回看護婦国家試験合格状況で3年課程の学校は大学46校、短期大学70校、養成所491校であり、2年課程短期大学12校、養成所342校、高等学校専攻科56校がある<sup>18)</sup>。教育内容は1990年カリキュラム改正が行われ、

図1 看護教育制度



ゆとりある教育と高齢社会の対応として老人看護の新設，学内実習と臨床実習の区分について改正された。この当時の情報科学教育の現状報告<sup>19)</sup>をみると，情報教育を実施している学校は81校で調査対象の488校の16.6%であった。科目の選択では必須が69.1%で，教員はほとんどが非常勤であるが，情報教育を約80%が必要としていた。1996年には文部省の「マルチメディアを活用した21世紀の高等教育の在り方に関する検討会」や1997年の「遠隔授業の大学設置基準における取り扱い等について」により，ハードの整備，制度の見直し，高等教育のマルチメディアの活用が提言された<sup>20)</sup>。1996年の看護学生のための情報科学教育方法に関する全国調査<sup>21)</sup>では，学内情報ネットワークがあるのは12.2%と少なく，予定のない学校は約60%みられた。学内情報ネットワークの導入が早いところでは1981年であり，73%が1994年以降であった。学内情報ネットワークを利用しているのが71校であり，教員の研究のためが最も多く，つぎに事務処理，学生教育であった。1998年の看護教育機関におけるメディア環境に

関する調査<sup>22)</sup>では、ビデオ機器の整備は教育用99.2%、学生用88.3%、教育用パソコンの整備状況は81.3%であった。インターネットの利用状況は全体で33.8%、大学96.6%、短大70.3%、養成所15.5%であった。情報教育の実施状況は全体84.2%、大学93.1%、短大97.3%、養成所80%であった。担当教員は専任が全体22.5%、大学63.0%、短大69.4%、養成所4%であった。情報教育項目は基本概念、キー操作、日本語、表計算、マウス操作が70~90%であり、統計処理が約60%であった。

#### IV. 調査方法

調査対象者は、京都市内の了解を得られた5ヶ所の国公立病院の看護職員2,219名であった。対象者に無記名自記式調査票を配布し、協力の得られた回収数は1,814名（回収率81.7%）であった。調査期間は、1998年9月~10月。調査項目はメディア・リテラシーの質問項目：周辺情報リテラシー11項目、パーソナル・コンピューター（以下PCと略す）・リテラシー7項目、ネットワーク・リテラシー3項目、意欲の程度の5項目を各1点として集計した。11項目を利用しているかひとつひとつの利用の有無をカイ二乗で検定した。また総合点の周辺情報リテラシーの評価を対象の学歴別（大学卒〔大学院卒を含む〕、短期大学卒、保健助産学校卒〔専攻卒を含む〕、看護専門学校卒）で $n \times m$ 乗を用いて検定した。また、パソコンの学習場所（小学校・中学校・高等学校・短期大学・大学・専門学校・職場の研修会・パソコン教室・自己学習）では、有無を $t$ 検定で統計処理した。学歴別（専門学校を1点、短大を2点、助産保健学校を3点、大学を4点）とメディア・リテラシーとの相関関係を調べた。

#### V. 調査結果

対象者は「看護婦（士）」（助産婦・保健婦を含む）1,514名のみとした。平均年齢 $29.9 \pm 8.1$ 歳、性別は、女性98.2%（1,486名）、男性1.8%（27名）、不明1名であった。学歴と平均年齢をみると短期大学や保健助産学校で年齢が全員の平均年齢より低く、専門学校や大学卒は高かった（表2）。また学習場所で



表2 学歴と年齢および勤務年数

学 歴	年 齢	勤務年数
看護専門学校	平 均 値	31.50
	度 数	941
	標準偏差	8.40
看護短期大学	平 均 値	26.40
	度 数	431
	標準偏差	5.75
保健助産学校（専攻）	平 均 値	28.98
	度 数	94
	標準偏差	7.12
大 学 卒（院を含む）	平 均 値	31.89
	度 数	27
	標準偏差	10.10
合 計	平 均 値	29.87
	度 数	1,493
	標準偏差	7.98
p	**	**

\*\*  $p < 0.01$ 

は職場研修会，パソコン教室，自己学習で平均年齢が高く，短期大学，高校，中学では年齢が低かった（表3）。

情報環境として，各附属病院の教育機関をみると短期大学では20～30台のパソコンが保有され，専門学校では15台以下であり，環境的に格差がみられた。

周辺情報の利用度では，留守番電話，携帯電話，ゲーム機器，図書検索において有意に大学，保健助産学校，短期大学卒に利用度が多かった（ $p < 0.05$ ）（図2）。コンピュータの利用度はグラフ作成，表計算，電子メール，インターネット，統計処理で大学卒や保健助産学校に多く，看護専門学校に有意に低かった（ $p < 0.01$ ）（図3）。

メディア・リテラシーでは，学歴でみると，大学卒で周辺情報リテラシー，PC・リテシー，ネットワーク・リテラシーが高く，一番低かったのは専門学校卒であった（ $p < 0.05$ ）（表4）。

表3 学習場所の年齢

		N	平均値	標準偏差	有意確率
小 学 校	あり	5	22.20	1.64	0.03
	なし	1,454	29.85	7.93	*
中 学 校	あり	27	22.11	1.31	0.00
	なし	1,432	29.97	7.93	**
高 等 学 校	あり	97	23.94	3.32	0.00
	なし	1,362	30.25	8.00	**
短 期 大 学	あり	289	23.78	2.00	0.00
	なし	1,170	31.32	8.13	**
大 学	あり	29	26.41	4.48	0.01
	なし	1,430	29.90	7.97	**
専 門 学 校	あり	153	25.20	3.38	0.00
	なし	1,305	30.37	8.13	**
職 場 研 修 会	あり	188	33.56	10.00	0.00
	なし	1,270	29.28	7.42	**
パソコン教室	あり	46	34.50	8.77	0.17
	なし	1,413	29.68	7.86	n.s
自 己 学 習	あり	598	31.03	7.84	0.38
	なし	861	29.00	7.89	n.s
そ の 他	あり	67	31.16	7.35	0.21
	なし	1,392	29.76	7.95	n.s

\*\* p&lt;0.01      \* p&lt;0.05

パソコンの学習場所で見ると、情報周辺リテラシーでは、小学校と大学が高く、8ポイント（満点11ポイント）以上あり、職場研修会とパソコン教室が7ポイント以下であった。PC・リテシーでは、小学校と大学が高く、5ポイント（満点7ポイント）以上あり、職場研修会と専門学校が4ポイント以下であり、ネットワーク・リテラシーでも同様であった（表5）。

学歴別に専門学校を1点、短大を2点、助産保健学校を3点、大学を4点としてメディア・リテラシーと相関をみると学歴とコンピュータ・リテラシーが

相関係数  $r = 0.303$  とやや正の相関がみられた (表 6, 図 4)。

図 2 学歴による周辺情報の利用度

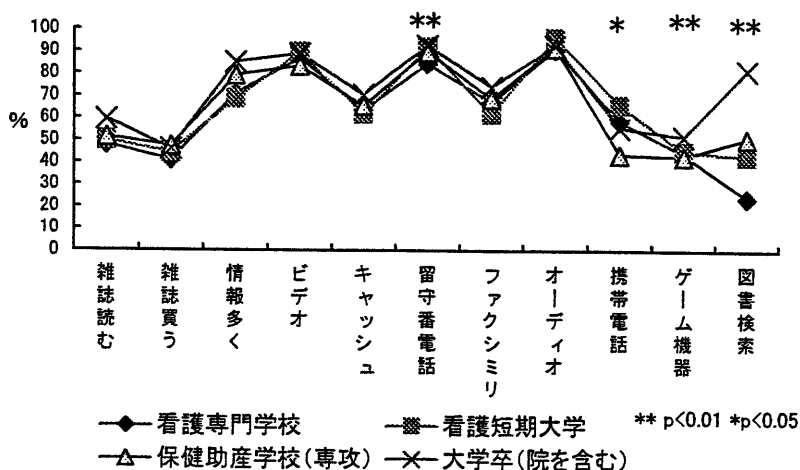


図 3 学歴によるコンピュータの利用度

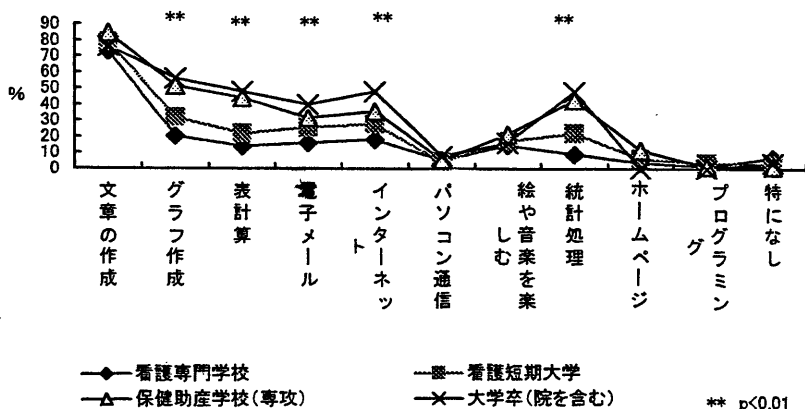


表4 学歴によるメディア・リテラシーと利用時間

教 育 機 関		周辺情報 リテラシー	コンピュータ・ リテラシー	ネットワーク・ リテラシー	意 欲	利用時間
看護専門学校	平 均 値	6.74	3.61	0.37	2.59	2.82
	度 数	911	480	494	919	345
	標準偏差	1.98	1.53	0.72	5.82	9.72
看護短期大学	平 均 値	7.06	4.44	0.59	2.36	2.34
	度 数	424	283	285	422	215
	標準偏差	1.90	1.61	0.87	1.45	7.21
保健助産学校 (専攻)	平 均 値	7.07	5.02	0.70	2.62	3.36
	度 数	94	65	70	94	49
	標準偏差	1.92	1.56	0.97	1.36	4.40
大 学 卒 (院を含む)	平 均 値	7.96	5.13	0.88	2.85	2.37
	度 数	27	24	25	27	22
	標準偏差	1.76	1.83	0.97	1.56	4.08
合 計	平 均 値	6.88	4.04	0.48	2.53	2.69
	度 数	1,456	852	874	1,462	631
	標準偏差	1.96	1.65	0.81	4.70	8.45
		**	**	**	n.s	n.s

\*\* p<0.01

図4 学歴とメディア・リテラシー

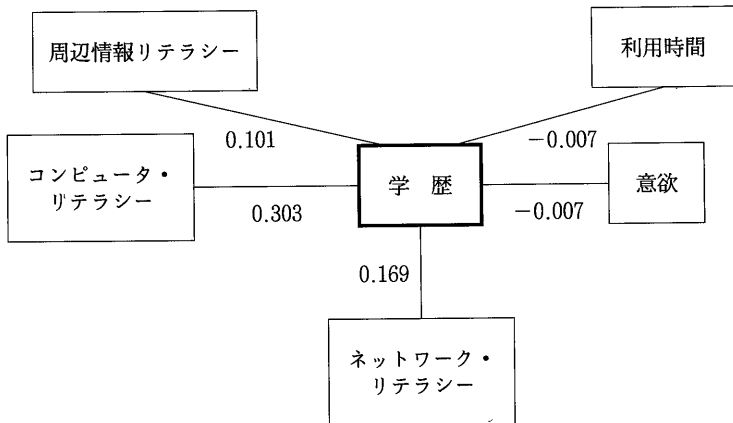


表5 学習場所によるメディア・リテラシー

学習場所		小 学 校		中 学 校		高 等 学 校		短 期 大 学		大 学						
リテラシー		n	平均値 p	n	平均値 p	n	平均値 p	n	平均値 p	n	平均値 p					
周 辺 情 報 リ テ ラ シ ー	あり	5	8.80	**	26	7.15	n.s	96	7.54	**	287	7.20	**	30	8.00	**
	なし	1,436	6.88		1,415	6.88		1,345	6.84		1,154	6.81		1,411	6.87	
パーソナルコンピュータ・ リ テ ラ シ ー	あり	4	5.25	n.s	18	4.39	n.s	70	4.34	n.s	206	4.49	**	25	5.40	**
	なし	844	4.04		830	4.04		778	4.02		642	3.90		823	4.00	
ネ ッ ト ワ ー ク ・ リ テ ラ シ ー	あり	4	1.00	n.s	19	0.63	n.s	73	0.41	n.s	206	0.58	n.s	26	0.81	n.s
	なし	865	0.48		850	0.48		796	0.49		663	0.45		843	0.47	
意 欲	あり	5	3.40	n.s	27	1.93	*	96	2.52	n.s	284	2.25	n.s	30	2.67	n.s
	なし	1,436	2.54		1,414	2.55		1,345	2.54		1,157	2.61		1,411	2.54	
利 用 時 間	あり	4	2.63	n.s	15	1.50	n.s	57	2.00	n.s	153	1.72	n.s	23	2.39	n.s
	なし	620	2.21		609	2.23		567	2.23		471	2.37		601	2.20	

学習場所		専 門 学 校		職 場 研 修 会		パ ソ コ ン 教 室		自 己 学 習		そ の 他						
リテラシー		n	平均値 p	n	平均値 p	n	平均値 p	n	平均値 p	n	平均値 p					
周 辺 情 報 リ テ ラ シ ー	あり	152	7.28	**	188	6.81	n.s	45	6.84	n.s	592	7.32	**	66	6.64	n.s
	なし	1,288	6.84		1,252	6.90		1,396	6.89		849	6.59		1,375	6.90	
パーソナルコンピュータ・ リ テ ラ シ ー	あり	91	3.82	n.s	139	3.97	n.s	34	4.03	n.s	408	4.24	**	46	4.30	n.s
	なし	757	4.07		708	4.06		814	4.04		440	3.86		802	4.03	
ネ ッ ト ワ ー ク ・ リ テ ラ シ ー	あり	99	0.22	**	139	0.31	**	35	0.49	n.s	424	0.59	**	47	0.85	**
	なし	769	0.51		729	0.51		834	0.48		445	0.38		822	0.46	
意 欲	あり	154	2.44	n.s	185	2.62	n.s	46	2.70	n.s	592	3.00	**	65	2.08	*
	なし	1,286	2.56		1,255	2.53		1,395	2.54		849	2.22		1,376	2.56	
利 用 時 間	あり	68	1.52	n.s	99	2.52	n.s	27	2.08	n.s	313	2.51	n.s	35	2.60	n.s
	なし	556	2.30		524	2.15		597	2.22		311	1.91		589	2.19	

表6 学歴とメディア・リテラシー

	学歴	周辺情報 リテラシー	コンピュータ・ リテラシー	ネットワーク・ リテラシー	意 欲	利用時間
学歴 Pearson の相関係数	1	0.101	0.303	0.169	-0.007	-0.007
有意確率（両側）		0.000	0.000	0.000	0.797	0.861
N	1,508	1,456	852	874	1,462	631

## VI. メディア・リテラシーに影響する学歴と学習場所

専門職である看護職において、その学歴が大学や短期大学であることにより、メディア・リテラシーに学歴のよる格差がみられた。大学や短期大学でメディア・リテラシーが高いのは、大学や短期大学では情報教育内容や情報教育環境が整っているが、専門学校では情報科学系の教員が非常勤であり、パソコンの台数も限定されるため、情報教育環境がメディア・リテラシーに影響すると考える。また、パソコンの学習場所は、自己学習するという意欲の高いことがリテラシーに影響すると考える。看護職において、各病院での情報化が推進されるなかで、院内研修や利用頻度が高くなり、学歴による格差は減少しつつある。パソコンの普及台数が、今日では、携帯端末によるEメールなど手軽にインターネットが利用できるようになり、今後はその利用が増大してくる。また、初等教育からの情報教育の充実により、10数年後には格差はみれなくなる。しかし、勤務年数15年以上では、メディア・リテラシーが低いいため院内教育の充実が必要であると考えられる。

看護婦・士がメディア・リテラシーを高めることにより、的確で迅速な情報を収集でき、情報をスムーズに記録・提供できれば、時間や場所の効率化をはかれ、より質の高い看護実践ができると考える。そのためには、メディア・リテラシーを高めための環境や指導体制が求められる。また、文部科学省による小中学校からの早期の情報教育が必要である。

## おわりに

本稿は、医療の情報化による看護婦・士のメディア・リテラシーが学歴とパソコンの学習場所による特性を調べた。メディア・リテラシーが、学歴でみると、大学卒や短期大学卒で高くみられ、大学や短期大学では情報教育内容や情報教育環境による違いによるものであった。メディア・リテラシーはメディアの変化によって大きく影響されるものであり、情報社会の変化に敏感になり、時代の方向性を見定めた教育が求められる。これは初等教育だけでなく、中学校・高校にこだわらず、医療の教育特に看護教育においても求められる。個人の好みや関心に固執せず、これから時代を担うためにはメディア・リテラシーを向上させ、情報化社会を实践できる人材を育成していくことが重要であると考ええる。

## 文 献

- 1) Marshall McLuhan "Understanding Media", McGraw-Hill Book Company 1964  
マーシャル・マクルーハン 栗原裕・河本仲聖訳 メディア論 みすず書房 p7 1987
- 2) 吉見俊哉 『メディア時代の文化社会学』 新曜社 pp.43-44 1995
- 3) 中野収, 森岡清美他編 『新社会学辞典』 有斐閣 p.1475 1993
- 4) Everett M. Rogers, "Modernization Among Peasants" Michigan State University p.72 1969
- 5) 水野博介 『メディア・コミュニケーションの理論』 学文社 pp.7-9 1998
- 6) 岩佐淳一 「メディア・リテラシーと情報化の中の＜私＞」『情報化の中の＜私＞』 福村出版 pp.55-61 1997
- 7) 鈴木みどり編 『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』 世界思想社 p.6 1997
- 8) Association for MediaLiteracy (AML)  
(<http://interact.uoregon.edu.edu/MediaLit/FA/MLAML>)

- 9) 鈴木みどり編 『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』 世界思想社 p.6  
1997
- 10) 菅谷明子 『メディア・リテラシー』 岩波新書 p.5 2000
- 11) 鈴木裕久 「情報機器利用能力－意識・行動の変化の基底－に影響を及ぼす要因  
の分析」 平成4年度文部省科学研究費重点領域 『情報社会と人間』 研究成果報  
告書 p.76 1993
- 12) 鈴木裕久 「『情報機器利用能力尺度』作成の試み」 平成3年度文部省科学研究  
費重点領域 『情報社会と人間』 研究成果報告書 p.72 1992
- 13) 郵政省編 『平成10年度通信白書』 大蔵省印刷局 pp.83-91 東京 1998
- 14) 是永論, 橋元良明, 廣井脩 「情報化と日常生活」 『情報行動と地域情報システム』  
東京大学社会情報研究所編 東京大学社会情報研究所 pp122-123 1996
- 15) 遠藤薫 「情報コンシャスネスと社会階層－情報化社会のライフスタイル戦略  
とその帰結」 『社会階層の新次元を求めて』 1995年 SSM 調査研究会 1998
- 16) 日本情報処理開発協会編 『情報化白書2000』 コンピュータエージ社 pp189-  
193 東京1998
- 17) 杉森みどり 「看護教育制度の現状と教育機関」 『看護 MOOK 看護教育』 金原出  
版 pp55-72 1993
- 18) 第89回看護婦国家試験合格状況  
(<http://www.gotecom.co.jp/kan/new/kango.htm>)
- 19) 中野正孝, 野尻雅美他 「わが国の看護教育における情報科学教育の現状－1988  
年実施の全国調査から」 看護教育 31(6) pp335-341 1990
- 20) 日本情報処理開発協会編 『情報化白書1998』 コンピュータエージ社 pp162-  
180 東京 1998
- 21) 中野正孝, 佐藤有紀子, 野尻雅美他 「看護学生のための情報科学教育方法に関  
する全国調査(3)－情報環境およびネットワーク－」 千葉大学看護学部紀要  
第20巻 pp81-86 1998
- 22) 浅野弘明, 園田悦代他 「看護系教育機関におけるメディア環境に関する調査結  
果」 京府医大短紀要 第9巻 pp167-177 2000  
(にしだなおこ 佛科大学大学院社会学研究科博士課程)



## Status Quo of the Media Literacy of Nurses: Educational Background and Learning Place

Naoko Nishida

The purpose of this report was to report the results of a survey on the media literacy of nurses with special emphasis on the differences in educational background and learning place. The subjects of survey was 1,514 (83.8%) out of 2,219 nurses who work at five hospitals in Kyoto City. The contents of the survey were media literacy (information literacy, personal computer literacy and network literacy). This paper examined how the answers to the question items reflected differences in educational background and learning place.

The results of the survey showed that the media literacy was higher at colleges of educational background, than in any other education group. It was found that the media literacy was higher at colleges and junior schools of learning place, than training in hospital and computer schools. This presumably derives from the fact that information technology instruction has been provided for them at the basic nursing education and the basic early education.